

「月見草の開花 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

月見草は、上林の作品にもあるように、「黄色い花の野草」と思われている。しかし、実はちがう。正式な和名の「ツキミソウ」*Oenothera tetraptera*は、花弁は黄色ではなく、薄い桃色をしている。しかも開花したばかりのツキミソウはほとんど無色だという。私はこの「本家月見草」をまだ一度も見ることがない。従って写真もない。



本家のツキミソウによく似た野草に「ヤナギラン」がある。同じ「アカバナ科」の植物である。スウェーデンなどの北極圏ではこのヤナギランが大繁殖していて、飛行機から見ると、地面が桃色に見えるほどである。日本では高原に見られるが、ほかのアカバナ科の野草に比べると珍しく、大規模な自生地は少ない。



上林のいう「月見草」は、恐らく写真の「オオマツヨイグサ」のことだろう。一般的に「月見草」という

と、この種をさすことが多い。正確には本家の桃色の花のものが「ツキミソウ」(月見草)、黄色のものは「マツヨイグサ」(待宵草)である。待宵草は「宵待ち草」とも呼ばれる。名の通り、夕方に開花して朝にしぼむことが多い。(写真はいずれも北軽井沢)



オオマツヨイグサは決して珍しい野草ではなく、空き地、道端、河原や土手など、どこにでも見かける。どちらかといえば「雑草」に分類され、草刈りを怠った空き地などに大繁殖して、駆除に苦労することすらある。大繁殖する理由は、その繁殖力(種子の多さと拡散)である。



これがオオマツヨイグサの種子である。花は茎の下のほうから次々と咲き、茎を伸ばしながら順に果実となる。この株には約 40 個の果実がついていた。一つの果実には数十個の種子ができるので、一株では恐らく千個以上の種子が作られることになる。